

博士論文特集にあたって —博士論文に見る研究テーマの動向—

矢入 健久
(東京大学)

小林 亮太
(国立情報学研究所)

川村 秀憲
(北海道大学)

博士論文特集は本学会誌で2000年から続く恒例企画であり、毎回、過去1年間に人工知能に関連する研究で博士号を取得した方々の博士論文の概要を紹介している。その主な趣旨としては、博士号取得直後の若手人工知能研究者にその研究内容を宣伝する場を提供すること、読者に最近の人工知能関連の博士論文研究のトレンドを知ってもらうこと、などがあげられる。

ご存じのとおり、人工知能研究は現在、第三次ブームと呼ばれる上昇ムードのまっただ中にあり、本学会の会員数(学生会員を含む)も2012年以降大きく増えている状況である。これらのことから、担当者らは本特集に例年以上の応募があるものと期待していたのであるが、ふたを開けてみれば予想を大きく下回る8件のみの応募に留まった。上記の背景から人工知能関連の博士論文研究自体が減ったとは考えにくく、単に本特集の周知活動が不十分であったと深く反省する次第である。もし、今回の募集を見落としとしていたという該当者の方がいれば、

お詫び申し上げると同時に、ぜひ、一般論文として博士論文の研究内容を本学会論文誌にご投稿いただきたいと思う。

しかし、件数が少なかった分、今回紹介される各博士論文はいずれもコアな人工知能に関するものであり、全体としては非常に密度の高い企画になっているのではないかと考える。各著者が選択した該当分野の内訳を見ると、ヒューマンインタフェースが3件、エージェントが3件、基礎・理論と機械学習・データマイニングが各1件となっているが、実際に概要を読んでもわかるように、自然言語処理やロボットなど人工知能の他の重要分野にまたがっている研究も多く、少ないなりに現在の人工知能研究のトレンドを反映したものになっている。

最後に、編集委員会では来年の本特集では再び多くの博士論文を紹介できるよう、効果的な周知方法を検討するつもりである。妙案があればぜひご教示いただきたい。